ペルー下りのその後

リベラルタに漂流したペルー下り達は、ゴム景気の終焉とともに南米全土に散らばった。 ある者は、ヤギを連れて徒歩でパラグアイや遠くアルゼンチンに向かったというから、壮大な旅であった。 http://p.booklog.jp/book/8035

（1）14版　第35081号

移民

パラグアイ編

アルゼンチンへ

転住で新境地開く

沼隈移住団の35年 ⑫

脱耕に偏見も

日本人移民史上まれな沼隈移住団の半生をたどる旅の最後に、アルゼンチンを訪ねた。ラパス移住地に買い切りをつけた人達者の多くが、経済事情の良かった隣国アルゼンチンに移ったと聞いたからである。

首都ブエノスアイレス。東京のパリといわれるこの都市の中心街から、北約三十キロのサンニコラス―二十町（二キロ）の正真ぶった。

「おやじは神辺で和菓子やせんべいを作っていた。だが、もともと中国からの引き揚げ者で日本が性に合わない。そんなことから移住に応募したと聞いています」。藤原は菓子工場を兼ねた二階建ての自宅応接間で、せんべいを勧めながら話した。

藤原一家はラパスで、慣れない農業を八年続けた。が、展望は開けない。考兵スをこう語った。

「十年近くたつと出てくれた方がよいといった雰囲気だった。耕地が不足し始めたんだ」。藤原は当時のラパスをこう語った。

▲息子のグスターボ君と温室の観葉植物を栽培する新田菊正さん（ラプラタ市郊外ウルキッサ）

農業をあきらめ、エンカルナシオンへ出て手慣れた菓子屋を開業。三年後にブエノスアイレスへ。

花作りを習う

「最初の五、六年は、入植地をはるのを『脱耕』と言って白眼視していたが、

アルゼンチン北部を貫流する大河ラプラタ川の河口、ラプラタ市から東へ約十五キロのウルキッサ移住地。黒々とした大地が地平線まで続き、野菜畑やビニール温室が点在する。沼隈移住第七陣で、藤原より一年遅れラパスに入植した新田菊正さんは、ここで観葉植物づくりに精を出していた。

新田の父、唐同さんは広島県御調郡向島町の出身。家族九人でラパスに入ったが、一カ月しないうちに見切りをつけて、エンカルナシオンやアスンシオンで運送屋をやりながらアルゼンチン入りの機会をうかがった。

そのころアルゼンチンは景気もよく、日本人移民の花作りがもてはやされ、パラグアイから転住者が相次いだ。五九年一月、一家は観光ビザでアルゼンチンに入国、そのまま居着く。花作りを習うため、四年ほど各地の日本人移住者のもとを転々とし、ウルキッサへ移って来た。

ウルキッサはイタリア移民用にアルゼンチン政府が造成、希望者が少なかったため一般公募した。一戸当たり十ヘクタール、家付き分譲。「道路や電気こそなかったが、開けた平たんな土地でパラグアイとはオラい違いだった…」。新田は言う。

大半が出稼ぎ

「結果的にはラパスを出てよかった」。藤原も新田も口をそろえる。しかし、アルゼンチンに移った沼隈移住団を訪ね歩いて、その大半が、家族挙げて日本へ出稼ぎに出ていることを知った。二人は転住組の中では例外的な成功者と言えるのかもしれない。

沼隈集団移住は成功だったのか。会った人の多くが「失敗」と答えたのは確かだし、今では「集団移住」の形が崩れているのも事実である。

南米に沼隈の分村をつくるという意味では、この試みが成功したとは言い難い。しかし、故郷を離れた幾人かが、南米の大地に新天地を築いたことも間違いない。

（敬称略）

＝おわり＝

「アルゼンチン編」は21日から掲載します。

養鶏王 老境の夢 築城着々

移民 パラグアイ編

沼隈移住団の35年 ⑪

鶏に感謝の碑

緑濃いパラグアイのヤシ林の中に、三層の天守閣が誕生しようとしている。築城の主は「養鶏王」と呼ばれ、パラグアイ日本人会連合会長を長く務めた広島県芦品郡新市町出身の前原深（七七）。

城には人間の権勢欲、顕示欲を満足させる何かがあるのかもしれない。しかし、日本から見て、地球の裏側に城を築くというのは、いかにも南米大陸的でユーモラスでさえある。

首都アスンシオンから国道一号線を南東へ三十キロ。衛星都市イタ市郊外の前原農場では、大型コンバイン男と住む二階建ての家。それを取り囲むように長男、二男、三男の家、倉庫、サイロなどが並ぶ。庭の真ん中には黄ニ二対、緑一対ほどの自然石で造った碑。「鶏魂碑」と漢字で彫って

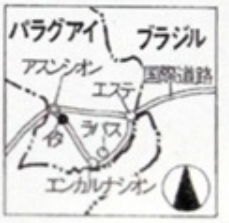
車はもうもうとほこりを巻き上げながら走る。

電動式の鉄さくの門を過ぎさらに行くと、前原が四

がつなりをあげ、サトウキビの収穫を急いでいた。国道から伝蔵のある所まで、そのサトウキビ畑の中を

（セセ）。

城には人間の権勢欲、顕示欲を満足させる何かがあ



ているんですから、これくらいのことはしませんとな…」。迎えに出てきた小柄な前原が、ニコニコ顔で言った。

借地農で出発

前原は沼隈移住団に加わり一九五八年（昭和三十三年）、妻の静子（七四）、父の広吉（故人）、子供五人の八人家族でパラグアイに来た。「日本の厳しい人間関係や仕事に嫌気がさした」のが動機だった。「新天地に夢を描いてというより、人間嫌いが高じた結果」とも。

だから、計画移住地のラパスには一週間しかいなかった。首都アスンシオン近くのイタ市に出て土地を借り、日本人とは離れて一家だけで生活を始めた。

当初は、日本でやっていたりした作りの技術を生かしてサンダル作り。次いでトマト栽培などを手掛ける。

二十年ほど前、現在地に移り養鶏を始めた。鶏と言えば経験の浅い素人しか知らなかったパラグアイで、前原のケージ飼育は「革命」だった。

今、二十二万羽、前原の鶏舎は市場の八割を独占する。はかにトウキビ、パイナップルが二百五十ヘクタール。連続の収穫作業を通じ、日本人が力を合わせ、前原農場の繁栄を支える。

地平線まで続くヤシ林、その一角に築城の夢を追う前原深さん（イタ市）

「日本観変える」

「仕事は男たちがやってくれる。農場はウシの運搬作業でした」。前原は先に立って歩きながら、母屋の屋上に通じる階段を上がる。農場の眺りは見渡す限りヤシ林。

「あれが城を建てる山ですよ」。一キロほど離れた小山を指す。前原の土地は、そこまで続く。今年中に

に設計と土地の造成を終え、四、五年かけて完成という計画。「設計は東京の建築専門の会社に頼み、かわらも日本の瓦一枚一枚を輸入して葺いている」と前原。

高さ三十メートルの小山に築城する。「ヤシの木を植えて防衛ともなろうしている。城は八角形の構造が終わっていた。屋根は三十センチの大木が七、八本、角の太い柱で固定もしっかりしている。

城の建築方法は変わっている。「日本人は使わない」というイメージを変えたい。それにパラグアイ人にシンセンを事の機会をつくってやりたいしと。

建築費は総額で約三十万円。パラグアイの物価水準からすると、ぜいたくな一つ家。いや豪邸といったところだろうか。「城」は、完成すれば観光名所になる。パラグアイの人々が大変関心をもってその進捗の状況を見守っている。大いに楽しみだ。（敬称略）

移民

パラグアイ編

多くが夢見る

牧場経営　自由移住地で奮起

沼隈移住団の35年 ⑩

昭和移住団の一人、広島県沼隈郡田尻町出身の山本逸喜さんは、日本人移住者の中では数少ない牧場経営者。百八十ヘクタールに年三千頭を飼う。エステ市のそば、ミンガグワスに独自の牧場を築いたグループの一員でもある。

ラパスで会った多くの人達が、パラグアイの中の「日本村」とも言えるラパス移住地を訪ね、事業団のはけ口（？）ばかりなくここまでにするのは並大抵ではなかった。

山本は一九五七年（昭和三十二年）、昭和第三陣で単身入植。わざ目標が牧場経営を夢見ていた、大豆と小麦の輪作だけでは、作柄が天候に左右され経営が安定しない。「牧畜の大規模経営に海岸をプラスできればなあ」。牧場経営に必要な資金に手が届かない彼らは、ラパスに単身入植。わざ自然をものともせず、一年半、開拓に汗を流した。しかし、働いても働いても実りが薄かったのが当時のラパス。「指導的な立場にある農業組合が弱体だったのが致命的だった」と山本は振り返る。

ラパス"脱出"

そんな時、ミンガグワス移住の話が持ち上がった。半身の身軽さから二つ返事でOK。ところが、移ってはみたものの、期待通りにことは運ばなかった。

原始林を焼き、野菜を植え、収穫しても、市場まで運ぶ足がない。やっとの思いで運んでも、売れ行きはかんばしくない。「十㌔、二十㌔を歩いて売りに行き、手ぶらで帰ることもしばしば」という状態だった。

そのうち、グループの中で「トマトを作ってみよう」との声が上がり、試作してみたら予想外に当たった。当時、移住地のもう一つの柱の製材業が不振だったこともあり、大半の入植者がトマトへ走った。一時はアスンシオン市場の八割をミンガグワスのトマトで占めたこともある。

自由移住地で牧場を経営する山本逸喜さん。フロンティア精神で頑張ってきた（ミンガグワス）

こうなると、都市に近い、あちこちの移住地でトマト栽培が増え、次第にうまみがなくなってくる。山本は徐々にトマトから養鶏に切り替え、同時にイグアス移住地に少しずつ放牧地を買い、牧場経営に燃えた。

援助なくても

事業団の直轄移住地では、機械貸与、特別融資のほか生活のさまざまな面で有形、無形の援助がある。だが、ミンガグワスでは入植者の創意工夫だけが頼りだった。

「最近でこそ援助があるが、初期は『脱耕者』のらく印を押され、事業団からなんの援助も受けられなかった」。一昨年出したミンガグワス移住地の「30年誌」は、万感の思いを込めてこう記す。

自由移住地で生き抜くためには、直轄移住地以上の知恵と努力が要求される。それがなければ移住地を去るほかない。人より先を行くフロンティア精神。山本にはそれがあった。

帰路、イグアス移住地にある山本の牧場に立ち寄った。牧童のホセ・フレッチカ君色のトタン屋根の小屋があるほかは見渡す限りの草原。所々にヤシの木や棄の落ちたかん木がポツ、ポツと見える。

ホセは「セニョール・ヤマモトはいい人。もう十七年も一緒に働いている」と日焼けした顔をほころばせた。（敬称略）

移民

パラグアイ編

独自の村開く

沼隈移住団の中には、計画移住地のラパスに入らず、独自のお金を開いたグループがあった。パラグアイ東端、パラナ川を挟んでブラジル、アルゼンチンと接する国境の町エステ市近郊のミンガグワスに入植した夕ループである。

を経て市の中心部に入ると、雑踏と騒音が渦巻いていた。叫び声、怒鳴、車のクラクション、店が発する音楽。静かな日本人移住地に比べると、とても同じ国とは思えない。

首都アスンシオンとエステを結ぶ幹線「国際道路」のフォス・ド・イグアス市と「友情の橋」で結ばれ、アルゼンチンのポエルト・イグアス市も目の前。そんな恵の利を生かした「自由通商都市」。人口約十万人。いまや首都アスンシオンに次ぐパラグアイ第二の都市である。

パラナ川対岸、ブラジル

沼隈移住団の35年 ⑨

遅すぎた開花　発展待てずに離散

街を生耳っているのは、アラブ、中国、韓国系の商人。それに、あらゆる人種、国籍の人が入り交じる。沼隈移住者の一人、スーパー・マーケットを経営する藤井敏勝さんは「治安もずいぶん悪くなりました」と顔をしかめた。

広島県山県郡戸河内町の出身、一九五八年（昭和三十三年）、兄の薫（六五）＝現在東京在住＝らに連れられパラグアイに来た。

将来性を確信

沼隈移住団に加わったものの、藤井兄弟はラパス移住地に入るつもりはなかった。将来性のある土地を探し、腰を落ち着けたのが、当時「友情の橋」を建設中のエステ近郊ミンガグワスだった。

「兄は広島市内の不動産を処分して、製材道具一式と自動車三台を持ってきた。ラパスに入植しなくても、やって行く自信があった」。敏勝は冷静に振り返る。「橋ができればエステの発展は確実」との読みもあった。

藤井兄弟と行動を共にしたのは、同じ船で来た広島と福岡出身の六家族。これに二足早くラパスに入植していた広島の二家族や単身移住者らが合流し、計八家族、四十五人。

当時、パラグアイ政府はエステの西二十キロに五千ヘクタールの開拓を計画、入植者を募集していた。五八年十月、一行はまずここに入った。「グループ開拓村」づくりはこうして始まる。

兄の薫は日本を出る時のプラン通り、製材所を開業する。同行者の半数近くがそれを手伝い、残りは農業に従事した。

しかし、ことは思惑通りには運ばなかった。道路ができ、橋が完成してもエステは沈んだままで、発展する気配が見えない。「将来の見込みはあったが、製材でやっていけるほどではなかった」。敏勝は兄の仕事を手伝いながら、次第にジリ貧になるのを感じた。

▲離農後スーパーマーケットを経営する藤井敏勝さん。「街がもっと早く発展していたら…」と離散した仲間をしのぶ。右は妻の唐子さん（エステ市）

発電所で弾み

入植四年後には最初の一家族が他の移住地へ。リーダーの兄・薫も六四年にブラジルへ転住してしまった。敏勝はその後十年、入植地で頑張り、七四年にエステに出て商売を始めた。

翌年から世界最大と言われるイタイプ水力発電所の建設が上流で始まる。エステはその建設基地になり、街の姿が一変する。

敏勝の商売も急ピッチで伸びた。今、店舗二つ、従業員五十人。エステ市でも指折りの事業家になった。

一方、入植地の農業も、エステという市場を得て安定し始めた。

しかし、最初に入った八家族のうち、大半は入植地を離れていた。残ったのは二家族と単身者二人だけ。「花が咲くのが遅すぎた」。敏勝は無念そうに言った。（敬称略）

移民

パラグアイ編

世紀役で奔走

隠居

開拓2回 悔いなし

沼隈移住団の35年 ⑧

「日系移住を働きかけてくれと頼まれ、ここを紹介するわけにはいかなくて」。移住地の世話役を務める馬屋原辰美さん（沼隈町出身）の紹介状を持ち、こうあって書をわたされた。三村はどの赤土の埃道に入り、三分行くと、馬屋原さんの家があった。赤土がむき出しの庭には、二十年前に植えたポプラと、五年ほどになる白樹キリが、寒気にエンカルナシオンから運ばれた苗木を約八十キロ北上。ピラポ移住地の東の端で線路と線を約八十キロ北上。三村はどの赤土の埃道に入り、三分行くと、馬屋原さんの家があった。赤土がむき出しの庭には、二十年前に植えたポプラと、五年ほどになる白樹キリが、寒気にエンカルナシオンから運ばれた苗木。

大地に抱けるむように赤く染まった夕焼けの丘陵、雲が流れる。馬屋原は、十六年前に建てたという自慢の自所のいすに座っていた。今年四月、脳卒中で倒れた。下半身が不自由になり、ベッドに寝るかいすに座ったままの生活。妻のシズコさんがつきっきりで世話をする。

率先して転任

「ラパスでは、土地を開こうとしてもうて将来のことを考えて、ここへ来たんです」

ラパスに入植したのが一九五七年（昭和三十二年）。六年で五十ヘクタールを開いた所でピラポへ移ってきた。

ピラポは、ラパス移住地職者が入植したほか、馬屋原のように他の移住地から再入植したケースもある。

ラパスの分譲単位が一戸二十五ヘクタールだったのに対し、ピラポは三十ヘクタール。それも希望の区画だけ分譲してくれた。馬屋原は四区画、百二十ヘクタールでスタートする。

「最初は、ここもラパスと同じジャングルでのう。山を開き、仮小屋を立てて、一からやり直しじゃった」。

好きでピラポへ転住したわけではない。沼隈移住団のリーダーの一人として責任もあり、将来を考え率先して動いたのである。「だれかが新しい所へ出んと、ラパスのみんながやっていけん。それは目に見えとった」

軍幼年学校に進んだ孫と馬屋原辰美、シズコさん夫妻。「開拓人生に悔いはない」（ピラポ）

孫に目細める

苦労のかいあって、今では二男の工＝たくみ＝（五二）が百二十ヘクタール、隣に住む三男も百二十ヘクタールを所有する。馬屋原は二、三男対策に先見の明があったわけだ。

しかし、二男の工は、二十三歳と十七歳の息子二人を抱え、今ほど自分の子供の身の振り方を考えねばならなくなった。「今は時代も違うし、おやじのようなわけにはいかん」と頭を抱える。

仮に百二十ヘクタールを二人に半分ずつ分けると両方が共倒れになる。かといって、新しく買うのは不可能に近い。土地の値段がはね上がっているのだ。このため、工は二男をパラグアイ軍の幼年学校へ進ませた。三年間の幼年学校が終われば、士官学校への道もある。

「どうするかは本人しだい。強制はしない」と工。祖父、祖母と記念写真を撮るため制服に着替えた孫は「まだ決めていない」と童顔を赤らめた。

孫の晴れ姿を満足そうに見ながら、馬屋原は三十四年を振り返る。「これだけの百姓ができたんですから、ここへ来てよかったと思いますよ」（敬称略）

移民

パラグアイ編

沼隈移住団の35年 ⑦

単身渡航 開拓人生 計算通り

別家族に同行

「沼隈移民の単身移住は六十人ほどと思っても、この頃に残ったのは、私を含めて十三、四人くらいなのでは？」ラパス在住本人会会長、上村寛さ（六六）は、ポルトガルからわらの家の前で、ラパス移住者の海を眺めながらつぶやいた。

彼は「これまでの例に、ハ住はほぼ計算通り」と余裕を見せながら言った。「身体を動かしてがむしゃらに働くのは性に合わない。できるだけ最短の安い労働力を使って開拓を進める」。最初からその方針で来た。

「三人分の労働力がある」ということで、弟と母の面倒を見た。

彼は、中学校を中退し六人の弟と母の面倒を見た。「十年たって弟たちも大きくなったので、今度は自分の好きな人生を。それで沼隈移住団に…」。当初、プ上村も大人の一人である。

長男で早く父をなくしたラパスへは一九五七年（昭和三十二年）十二月の第七陣で着いた。同伴の家族とほぼ同時期、他の入植者と同じ二十五ヘクタールの開拓地を得て一人で山に入る。一年早く来ていた友人との交信で、現地の状況はほぼ分かっていた。だから、それなりの準備ができた。

山を開くため現地人を雇う費用、物々交換で賄われるタオル、ふろしき…。

「現地の状況に合わせた物心両面の準備が、ずいぶん役立ちました」。開拓は年の長女、栄子さんと結婚。新婚生活は入植地に建てた小屋で始まった。

「自分でアーチャー（おの）を使うことはなかった。ねえ。製材も人部人にやってもらった」。十年ほどで開ける土地は全部開墾。六七年、義兄と共同でラパス初の英国製トラクターを購入した。

「七一年、二回目の家を新築。七七年、新しく二十五ヘクタール購入。八二年、さらに十五ヘクタール購入…」。ポケットから手帳を取り出して読み上げた。開拓記録をきちょうめんに整理している。

現在の所有農地は百七十ヘクタール。家も四回建て替えた。機械はコンバイン二台、トラクター四台、トラック一台。

トラクターの上で孫を抱く上村寛さん。クールな開拓精神で大規模農業を築いた。前列は妻の栄さんと息子のメイソウさん（ラパス）

効率的な経営

「機械はほとんど義兄と共有。早くそろえ、早く借金を返す。そういうやり方でできました」。結果的には、むだな投資を省くそんな経営手法が、今日の大規模農業につながった。今では仕事はほとんど息子のメイソウ（三）に任せ、使用人四人を使いやっている。

ラパスでもひと際目立つ上村家の大きなガレージと倉庫。白いトタン屋根がまぶしかった。

「単身者は身軽でしょう。あちこちと転住して、結局、定着できなかった人が結構いろんですよ」。彼の場合、結婚が早かったのでラパスに腰を据えた。それだけ他の単身者より経営基盤を固めるのが早かった。日本人会、農協の役職などもそつなく務めてきた。

同じ開拓人生でも、上村のように淡々としたクールな人生もある。（敬称略）

移民

パラグアイ編

篤農

家族挙げ米づくり

沼隈移住団の35年 ⑥

手探りで開田

戦後間もない頃、日本人は米を自給することはなかった。主食の米に始まり、みそ、しょうゆ、納豆、豆腐、ちくわ、かまぼこ……。戦後家庭の食卓に欠かせない食品の多くが、日本国内より安価で日本人の口に合うパラグアイ産の大豆から作られていた。

あるオ自給用に米をつくり始めたんです。農初はあぜ作りの方も分からず、本を見ながらやっと見よまねで田を作り、もみをまきました。手探りの時代を振り返りながら、秀之は家から一キロほどの農地に向いたA氏に案内してくれた。

他人任せ批判

彼が耕す水田は二カ所で約一ヘクタール。精米して四～五トンの収穫があり、半分は自家消費、残りは出荷する。

「田が小さいんで機械が入らないんですよ」。田植えから刈り取りまで、すべて手作業。現地の使用人は泥田へ入るのを嫌う。だから米づくりは柿木家の家族労働だけでやっている。

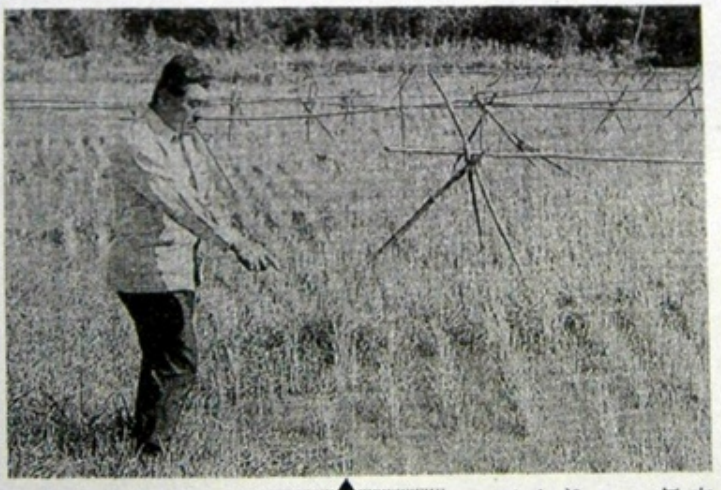
今、家族は父の裕司、母の雅子さん、秀之夫婦と子供五人の合わせて九人。それに四人家族の弟夫婦が隣に住む。

レンガづくりの家が増えているラパス移住地で、柿木家はまだ二十年ほど前に建てた二階建ての板張り。「大家族で、生活のやりくりが大変ですよ。だから何年たっても、よそのような家が建てなくてねえ」。秀之が笑いながら言った。

それでも、兄弟二人で百六十ヘクタールもの農地を耕し、昨年からは日本へ出稼ぎに行った親類の畑五十ヘクタールも預かっている。二年契約で、借り賃は一年三百万グアラニー（約三十万円）。相場の三分の一である。

「やっぱり百姓は、自分で先に立って仕事をせんとね。パラグアイ人に任せといたら、結果はえそうことになりませんよ」。秀之はパトロン農業に対する批判をちょっぴり漏らした。

足の悪い父に代わり、早くから一家の大黒柱として働いてきた彼は「最近の他人任せの農業の風潮に、なかなかなじめない」と言う。米づくり一つとっても、ただ家計のためだけでなく、秀之の篤農精神の発露なのかもしれない。



▲苦労して開いた水田に案内してくれた柿木秀之さん。日本の山村風景と見間違えそう（ラパス）

土に生きる心

家の前は「神原道路」の名を残す幅三㍍、延長四㌔ほどの赤土道路。一帯は「神原地区」と呼ばれる。「神原」はもちろん沼隈集団移住を計画し、実行した当時の沼隈町長、神原秀夫（故人）を記念してのものである。

神原地区には入植時、二十戸以上が入っていた。それが、くしの歯が欠けるように次々と減り、いまでは八戸が残るだけ。

離農の理由は各戸さまざまだろう。しかし、残って頑張る秀之の生き方を見ていると、「土に生きる」というか、開拓精神というか、そんな心が年月とともに薄れてきたことが、離農に拍車をかけたように思えてならなかった。

（敬称略）

移民

パラグアイ編

新世代

跡を継ぎ農地倍増

沼隈移住団の35年 ⑤

開拓時代の苦難が始まって十一年後の一九八一年（昭和五十二年）、中国東部は移住者を動かして現地を歩いた。モンテ（密林）を開くレンガ造り、赤瓦屋根の大きな家が二棟立ち、近くの住民は「あすこに住んでる一家は日本人」とうらやましがる。開拓するんボで苦労していた。

売り食い　昔話

現地は一作年、六十四歳でじくなっていた。心臓発作だった。二十四年前、「冠婚」もらった移住　新婚中だった赤がわらぶ

記憶の時計を巻き戻し、開拓時代の日本式家屋を見学して食いつないは、もう使われていなかった。そんな昔話が出た。

第一陣、沼隈郡は「十二　ラパスに入植したのは五年目の家　やっと天井付　六年。伝はまだ三歳だった」という話出しで、ルポ　た。父・忠孝、母の玉枝に登場する、記事を寄せ　さん、弟の浩二さんの一家に「ラパスの苦難家を訪れ　四人。ルポに「三年のつもり」と来た」という農業の苦

3年前に新築した家の前でくつろぐ故宮里忠孝さんの長男・伝さん、アケミさん夫婦と3人の子供（ラパス）

難がある。

「おやじについてモンテの木を焼いたこと、棒をとるツンゲ（柏手リ）、であげたハ（麻）がトウモロコシの種を二粒ずつ入れて歩いたこと。覚えている。

七十五ヘクタールの農場に二人でも多くの働き手が必要だった。

行きたかったが「言い出せなかった」。ペイントの油増した。使用人が二人、コンバイン一台、トラクター三台、トラック二台。富裕家は、ラパスの教少ないトロン農家の地位を築いた。

入れ、農地も百五十ヘクタールに倍行して日本にいる。弟・浩二は東京で結婚式挙中に結婚し、そのまま東京に住む。「おれ一人、置き去りですよ」。伝は、気にも留めないように笑った。

ラパスが市制を敷いた四年前、スペイン語が達者な彼は市議会議員に当選。今年五月に再選された。それ

市議会議長に

八八年、二世のアケミ（三）と結婚。七歳を頭に三人の子供がいる。ただ、母の玉枝はパラグアイ生まれ

伝が農業の先頭に立つようになって、作付けを大豆に上げ「なぜ日本人だけ

の味・美恵子さんの留学に同と小麦に絞る。大型機械を

るのはそれくらい」。伝は開拓時代の記憶をたどった。

小、中学校は現地人の学校に通い、パラグアイ人の友達とともに育つ。高校に

ばかり、二期目にして議長の座についた。現地人の人望も厚い。

しかし、日本人移住者と現地人の生活格差が広がるに連れ、両者の間の溝も広がる。入植当時、モンテを開いた日本人の苦労をたな

のか」という現地人の不満が高まっているという。

摩擦解消へ力

伝ら若手は、摩擦を和らげるため、日本人と現地人に働き掛けて、サッカー場をつくった。農協の土地を市で借り上げ、両者が汗を流したのである。

「みんな小さい時からけんかもし、助け合いもした仲です。おやじもパラグアイの土になったし、もう日本人と現地人がいがみ合う時代でもないですから」。三十五年この地に生きて来た自負なのか、議長という肩書からか、伝は自信に満ちた表情で言った。

「父は晩年、酒を飲んでは『こんなとこまで連れて来てすまんなあのう』と口癖のように言うとりました。おれはいつも『そんなことはない。いいとこだよ』と返事しとったです」

屈託のない彼の言葉に、沼隈移住団が新しい世代に入り始めたことを感じた。

（敬称略）

移民
パラグアイ編

沼隈移住団の35年 ④

凶作
出稼ぎで借金返済

天災被害が続く

この十年、ラパス移住地の農業は順調に伸びてきた。だが、昨年から不作にかけて史上にない凶作。真冬の小麦が、昨年九—十月の収穫期に遅霜と雹（ひょう）にやられ、夏作の大豆も今年四—五月の干ばつで収穫が激減した。[illegible]農家は[illegible]しを待っていた。

「忘れもしない。昨年の十月だ。刈り取り直前の小麦が、まるで火のようにただれ、ほとんど全滅したんです」。[illegible]は厳しい顔をして、苦しそうに振り絞った。大豆は[illegible]年の三分の一しかとれなかった。

どの農家も追い詰められた。とりわけ、孝由のように所有地七十五紛程度の小規模農家は、凶作、不作と続く凶作で大きなダメージを受けた。借金を返すどころか、さらに借り入れを増やさざるを得なくなったのだ。

孝由は一九五七年（昭和三十二年）一月、沼隈第二陣として父の弘に連れられ家族四人で入植した。沼隈町出身者。父は七七年、六十一歳で亡くなった。孝由はその少し前にパラグアイ生まれの日系二世エミリアと結婚、今では三男一女がある。

建てて二十五年ほどになる板張りの家の軒先で孝由は話した。エミリアがマテ茶を勧めてくれる。途中から近所に嫁いでいる孝由の妹みどりも話に加わった。

放し飼いの鶏が軒先を走り回り、入植直後に植えたというサボテンが直径約五十センチ、高さ十メートルにも伸びている。

「小麦もだめ、大豆もだめ。借金を返すには、トラクターと小型トラックを手放すほかないでしょう」。残る農機具はコンバインと、もう一台のトラクター。「これだけは残しておかないと、農業になりませんから」。孝由はつらそうに言った。

「あのひょうさえなかったら…」。門田孝由さんは妻のエミリアさん（中央）、妹のみどりさん（右）と凶作を悔しがった（ラパス）

母親は熱海へ

銀行、農協からの借り入れは利子だけで年三〇〜四〇%。延滞利息は五〇%を超える。利子を追うだけで精いっぱい。「こう凶作が続くと、農業だけでは家族を養えませんよ」

生きて行くために、最も手軽に金になるのは日本への出稼ぎ。

母のエツ子さん（〇）は、既に昨年から熱海のホテルへ出掛けている。七月初め、十七歳の長男が後を追って旅立った。「『ここにおっても仕方ないから日本へ帰れ』言って出したんです」。孝由は「自分も、みなほっぽらかして日本へ帰った方がまし」とまで言う。

国際協力事業団エンカルナシオン支所の調べでは、今年六月現在、ラパスから日本へ出稼ぎに行っているのは百二十七人。全移住者九百二十九人の一三・七%に当たる。

出稼ぎ者の多くは二十、三十代の農家の二、三男。分家対策という側面もあるにはあるが、二年続きの凶作で、出稼ぎする高齢者も出始めている。

小農に大打撃

「借金を最小限に抑え、堅実第一でやってきたもんが、結局、伸びきれなかった。自分もチャンスをつかまえ損ねたんだと思う。この凶作で小農はつぶされるかもしれん…」。一八〇センチの長身をかがめ、孝由は小声で言った。

九月半ば、現地に電話を入れると、今年の小麦も遅霜に見舞われ、半作程度しか見込めないと言う。

入植以来、幾度かの危機に直面したラパス移住地に、今また新しい大きな波が押し寄せている。

（敬称略）

移民

パラグアイ編

販売先に苦労

一九七八年八月から、パラグアイ[illegible]

[illegible]れた。

巨大な農場、政府から取[illegible]をクレジットしたところに、昔[illegible]の農場りの家と、唯ぞうや牧[illegible]農業、ゼレーションならかな[illegible]

なからかな農村の静かな小[illegible]

沼隈移住団の35年 ③

パトロン農業

小麦と大豆で成功

「日本では三男の工場へ通うとったんですよ。でも給料はようないし、パラグアイへ来たら何とかなると思うて応募したんです」。彼は移住に踏み切った理由を、とつとつと語った。

「言いてからの苦労は、みんなと同じですよ」。二十五ヘクタールの開墾地を妻と二人、真っ黒になって切り開いた。

「入植したころは何を作ったらええか分からんでねえ。みんながええいうもんは全部やってみました」。トウモロコシ、綿花、落花生、大豆、小麦、野菜、米…。儲けがいいと聞いて手出したこともある。

何にまみれて種をまき、どうにか収穫しても、どこへ売るかが大問題だった。やっと見つけた買い手には買いたたかれる。家族が食べていくのがやっと。

安定まで15年

事情は他の入植者も同じ。五年、七年とたつうちに仲間が次々と移住地を離れ始めた。右隣の家は隣国アルゼンチンへ、左隣は国内のもっと広い移住地へ。渡辺は、去って行く仲間の土地を次々と買い、自分の耕作面積を広げた。

「入って十五年くらいはきつかったなあ。でも、子供も大きくなるし、作付けも大豆と小麦で安定してね。機械も入れて少しずつ楽に…」。渡辺は節くれ立った手を見詰め、振り返った。

▲開墾。見渡す限りの小麦畑は渡辺真澄、ヨシエさん夫妻の汗の結晶（ラパス）

無理をしてでも土地を買い足したことが、結果的には正解だった。三人の息子のうち長男と三男は日本へ帰り、いま二男の保夫（四）が跡を継いでいる。

使用人に任す

大型コンバイン二台、トラクター三台を駆使しての大規模農業。それもいまでは使用人任せ。渡辺や保夫が機械を使うことはほとんどない。いわゆる「パトロン農業」。移住地の大規模農家の大半はこうした経営形態だという。

ふだんは敷地内に住む使用人二人で間に合うが、農繁期には十人近いパラグアイ人を使う。「自分でやるより使用人にやらせた方が能率がいいんですよ」。途中から話に加わった保夫が自信に満ちた表情で言った。保夫は三キロほど離れた場所に家を構え、父の所まで通って来る。

もちろん、ラパスに残っている移住者すべてが、渡辺のように恵まれているわけではない。ラパス農協の調べでは、組合員の平均耕作面積は九〇ヘクタール。しかし、平均以上は三〇％しかなく、残る七〇％は依然、九〇ヘクタール以下の「小規模農業」にとどまっている。（敬称略）

移民　パラグアイ編

大農の夢追う

沼隈移住団の足跡をたどる旅は、エンカルナシオンから北東四十㌔のラパス（旧フラム）から始めることにした。入植から三十五年。何と言ってもラパスは沼隈団が最初に定住を目指したところ。

早朝、移住地へ通じるアスファルト舗装の幹線沿いは真っ白い霧に覆われていた。途中から、ラパス移住地へ向かう未舗装の約七㌔の赤土道に乗り入れる。好天続きで、車は赤いほこりを巻き上げた。

地平線のかなたまで、見渡す限り小麦畑が広がる。その雄大な光景は豊饒（ほうじょう）という言葉がピッタリする。「赤い土」、テラローシャ。鉄分が高く地味豊かで、農地としての価値は極めて高い。二十年は肥料をやらなくても作物が育つとも言われる。

そのテラローシャに大農の夢を描いて、日本人が入植し、コロニアをつくった。時間が止まったようなエンカルナシオンの駅に比べ、開拓に流した汗と費やした時間が、沿道の農場や集落のたたずまいに、しっかりと刻み込まれている。

テラローシャ　赤い大地　定着2割

沼隈移住団の35年 ②

開拓し尽くす

「日本人の多いこの辺りは、もうすっかり開拓されて、原始林は所々に残っているだけですよ」。案内役を務めてくれる沼隈移住者の一人、小田俊春さん（[illegible]）が「ここも、あそこも日本人の畑」と指さしながら説明する。かつてここが密林だったとは、想像もつかない。

車は日本からの戦後移住第一陣が入ったチャベス移住地を抜ける。道路のそばにスペイン語で「ラパスへようこそ」の大看板。目指すラパス移住地である。しばらく走って市街地らしい場所に乗り入れた。農協、公民館、中学校、診療所…。どれもレンガ造りの立派な建物である。三階建ての農協の正面玄関に、日本語で「ラパス農業協同組合」と書いた大きな木の看板が掛かる。向かいの建物は「ラパス日本語学校」の看板。連絡しておいた農協参事の河野[illegible]さんが迎えてくれた。河野は一九五八年（昭和三十三年）七月、広島県山県郡豊平町から父、九平さんに連れられ家族八人でパラグアイへ。二年後の六〇年に農協に入り、以後三十年以上、農協一筋に勤めてきた。「沼隈移住団の関係者で、いまラパスに残っているのは十家族だけ。定着率は二割強といったところでしょうか。いろんなことがありましたから」

▲沼隈移住団が入植して35年。「ラパスへようこそ」の看板の前に立つ河野[illegible]さん（右）。「当時は原始林でした」と感慨深そう（ラパスで）

消息不明者も

[illegible]

内のサンタロサ、フラム、旧ラパスの三地区に[illegible]。その時、[illegible]一名をラパスと改めた。

三地区[illegible]百二十[illegible]千人が住み、日本人・日系人が三分の一[illegible]。その中心となった[illegible]だった。[illegible]十二家族、[illegible]一家はラパスへ入ったとになっていた。

「何もかもまったくの原始林からのスタートでやって来たんですからね。よくやったと思いますよ」。河野は感慨深げに言う。

その後、ラパスに見切りをつけて出て行った人も[illegible]いた当時の言葉が、ふと途切れた。病気、転住、分[illegible]、[illegible]、三十五年の歳月に、語り尽くせない人間ドラマがあった。消息不明の人も少なくない。移住団の正確な記録はない。「生きるのに精いっぱいでした」

四年前、旧フラム移住地[illegible]

（[illegible]）

移民

パラグアイ編

題字は竹澤丹一氏

広大な南米の地に「新しい村」建設の夢を描き、広島県沼隈郡沼隈町がパラグアイのラパス（旧フラム）へ「町ぐるみ集団移住」を実施して三十五年。日本人移民史上でも珍しいこの集団移住者は今、どうしているのか。（ニューヨーク支局・小野増平記者）

変わらぬ駅舎

「あのころと何も変わっていない。まるで時間が止まっているようですね」。ていたが、その期待は裏切一九五七年（昭和三十二られ、駅の構内を豚と牛が年）二月、沼隈移住団の第散歩しているのには驚いた三陣、三家族、二十三人の一人として、この地に第一歩を刻んだ小田俊春さんは今は今も変わらず、一九〇一年製の、まるでたいて走る南米最古の蒸気機関車も懐かしそうな声を上げた。

エンカルナシオンは、日本人移民の玄関口だった。沼隈移住者が中心になって八五年にまとめた「フラム移住30年の歩み みどりの大地」は、五六年の第一陣到着の模様を次のように伝える。

「エンカルナシオン駅へ列車が到着、パ国への第一歩をしるしたのは暮れも押し詰まった十二月二十八日。赤い土ぼこりの西部劇に出てくるような殺伐としたうら寂しい町だった。パラグアイ第二の都市と聞いていたのだが、その期待は裏切られ、駅の構内を豚と牛が散歩しているのには驚いた。レンガ造りの古ぼけた駅舎は今も変わらず、一九〇一年製の、まるでたいて走る南米最古の蒸気機関車も健在だった。三十五年前と同じように、構内で牛が草をはんでいる。

「第三陣がエンカルへ着いたのは陽時くなり始めた頃。こんな心細いところ

苦い門出 進学やめ父に従う

沼隈移住団の35年 ①

沼隈移住者たちが第一歩をしるしたエンカルナシオン駅は35年前のまま。小田俊春さんは、しばらく声も出なかった（エンカルナシオン）

だった。こんな心細いところまで連れて来た親を本当に恨みましたよ」。かつてと同じ風景の中に身を置いて、俊春の記憶既は「あのころ」に逆回転を始め

家族ごと応募

当時、彼は中学二年、十四歳。県市広町でサルベージ会社に勤めていた父の俊光（故人）は、パラグアイへの沼隈集団移住を聞き、「おれは商船学校へ行き」八人家族全員で応募する。

たかったのに、おやじが無理やり…。生活も苦しかったんだろうな」。俊春を含めて、子供は十四、十二、八、七歳の男女二人ずつ。開拓という荒々しい仕事が手伝えるのは男だけだった。

降り立ったエンカルナシオンの町を後に、移住地へバスに揺られた俊春たちは、さらに驚く。道路も学校も病院も整備されていると聞いて来たのに、何もない。目の前に広がっているのは、自分たちの土地だという幅二百五十メートル、奥行き二キロの見通しもきかない広大な原始林だけだった。

「とんでもないところに来た。日本へは二度と帰れない。あの時はそう絶望しましたよ」。テントを張り、直径五、六十センチもある大木を切り倒し、焼き払い、少しずつ原始林の奥へ奥へと開墾を進める毎日が続いた。川水を飲んで、家族全員苦しい生活が続いたことある。

農業に見切り

わずか半年で帰国、残って来た同船者は残る全員、全員は農業に見切り、中間に穴を掘り埋めて、何でも食べましたよ」。俊春は笑う。切り出した木を焼き、なんとか家らしい小屋を作った時、入植後一年が過ぎていた。

俊春たちは十二年間暮らし、土地もビ十ヘクタールに広げたが、結局、六八年に見切りをつけて出ることを決め、エンカルナシオンの日本旅館を開く。

「働いても働いても自分が見えないし、自分の農園の繁栄を夢としたからね」。今、その跡は首都アスンシオンで日本レストランを経営、兄、弟とも健在である。

「やっとここ十年ですよ、楽になったかなと思うのは…」。あまりにも苦い門出となった駅舎を眺めながら、俊春はつぶやくように言った。

翌日から、彼の案内でパラグアイ全土に散っていった沼隈移住団の人々を訪ね歩いた。（敬称略）

11面に特集